様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年５月２５日現在

研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：２００６～２００８
課題番号：18330101
研究課題名（和文）若者の中間集団的諸活動における新しい市民的参加の形

研究課題名（英文）A new form of civic engagement among youth through intermediary group activity

研究代表者
浅野　智彦(ASANO TOMOHIKO)
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号：00262220

研究成果の概要：韓国・ソウル市および東京都杉並区において 16 歳から 29 歳の男女を対象にパーソナルネットワーク、自発的集団への参加状況、社会的参加、政治的参加の各領域について量的調査を行った。その結果を統計的に分析した結果、集団所属の多元性および親密な友人関係が社会的参加・政治的参加を促進すること、ソウルとの比較において東京の若者が学校外の活動において不活発であることが明らかにされた（なお高校段階での部活については、社会的参加・政治的参加との関連がみられなかった）。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
２００７年度	8,700,000	2,610,000	11,310,000
２００８年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
年度			
総　計	14,000,000	4,200,000	18,200,000

研究分野：社会学
科研費の分科・細目：社会学
キーワード：青少年、文化、余暇的活動、社会関係資本、一般的信頼、公共性

１．研究開始当初の背景
急速に多様化・流動化しつつある現代社会において異質な他者との共存・協力を調達する作法としての公共性はますますその重要性を増している。とりわけ次世代の社会を担う若者においてそれがどのようなプロセスをたどって習得されるのかは理論的にのみならず実践的に重要な問いである。

２．研究の目的
若者の生活において重要な位置を占める余暇的活動、特に彼らが形成する趣味集団が公共性涵養の機能を持っていること、およびそれがどのような条件下でよく発揮されるのかを明らかにする。

３．研究の方法
質問紙調査を東京都・杉並区および韓国ソウル市において実施し、そのデータを統計的に分析する。調査の概要はそれぞれ以下の通り。

【東京調査】
対象：東京都杉並区在住の 16 歳から 29 歳の男女
抽出：無作為・二段抽出
回収方法：留置法
有効サンプル数：719
回収率：40%
質問項目：趣味活動、趣味集団への加入および政治的・公共的活動への参加やそれについての意識

【ソウル調査】
対象：ソウル市・西大門区在住の 16 歳から 29 歳の男女
抽出：割り当て法
回収方法：留置法
有効サンプル数：801
質問項目：上記と同じ（日本語の調査票を協力者を得て韓国語訳）

得られたデータの統計的分析に当たっては結果を解釈するための理論枠組みとして社会関係資本論の諸先行業績を参照する。

４．研究成果

データ分析の結果から以下のようなことが明らかにされた。

（1）趣味集団への参加は、間接行動＝支払参加に対して正の関連を持つ。したがって、弱いものではあるが、それは社会関係資本としての効果を持つと考えられる。だが、より注目に値するのは、集団所属の多元性が一般的信頼・政治的参加・政治的会話に対してもう少しはっきりしたプラスの関係をもっていることだ。趣味集団に所属するかどうかということよりも、異なる種類の集団に所属することが独自の効果を持っているのである。

辻大介や浅野が指摘するように若者の人間関係は使い分け志向を強めている。この志向性の度合いを尋ねる質問と所属の多元性との関連は有意にプラスとなる。使い分け志向が所属集団の多元性として現れたときに政治参加を活発化させるのだとすれば、しばしば眉をひそめられがちな若者の対人関係スタイルのうちに公共性・市民性への萌芽が見出されることになろう。

（2）趣味友人・高校部活経験はどの被説明変数に対しても有意な関連を持たない。ということは、趣味縁という形で一括されてはいるが、社会関係資本として機能する趣味集団とそうではない趣味友人というように区別しておいたほうがよいということになるだろう。趣味友人の有無を他の変数との関連で見てみると、パーソナルな領域の社交的積極性とプラスに関連することがわかる。つまり趣味縁は公的な領域へと延びていく趣味集団と私的な領域へと延びていく趣味友人という二つの面からなっていると理解すべきなのである。

（3）趣味友人をもつ若者（あるいは部活参加経験のある若者）に比べて趣味集団に参加する若者は少ない。特に韓国との対比でいえば、部活と学校外の活動がトレードオフの関係になっているようにも思われる。もしそうだとすれば、日本の若者の趣味縁は、趣味友人の面に大きく傾いており、しかも趣味集団が担うはずの部分を学校が代替してしまっているということができるかもしれない。結果、趣味縁の持つ公的領域へと延びていく側面が相対的に小さくなっているように思われる。

（4）とはいえ、私的領域がそれ自体として公的領域と背反的な位置にあるわけではないことに注意すべきである。実際、「仲のよい友だちの数」および「恋人交際経験の有無」は政治参加・寛容度にプラスの関連をもっている。パーソナルネットワークの広さと質とが公共性・市民性に対して一定の効果を持つことをこれは示している。

今日の若者のコミュニケーションを描き出すのに「コミュニケーション自体が目的であるようなコミュニケーション」といった言い方がよく用いられるのだが、その自己目的的なスタイルが実は副次的な効果において公共性・市民性へとつながっている可能性がある。

（5）一般的信頼に対して愛国心・生活満足度が大きな効果を持つことが確認された。このことは社会関係資本論の前提に対してある疑問を提起する。すなわち、一般的信頼は公共性・市民性の前提であるというよりは、恵まれた立場にある人々の自己認識の反映ではないかということだ。

（6）メディアの利用について。テレビや携帯電話が社会関係資本にとってマイナスの効果を持っていないという点で、辻の先行研究と一致した結果となっている（ただし一般的信頼に対してプラスの関係を持つとまでは言えない）。また、政治的参加との関係でいうとテレビも携帯電話も政治的関心の低下や政治的参加の活発さとは関係を持たないのだが、政治的有効性感覚とだけはマイナスの関係を示している。

以下に分析結果表の一部を示す。

表　一般的信頼

説明変数	β		β	
性別（男＝1、女＝2）	0.06		0.06	
年齢	0.00		0.00	
父学歴（高等学校まで＝1、それ以上＝	0.07		0.07	
母学歴（高等学校まで＝1、それ以上＝	−0.09		−0.09	
趣味に関するサークルや団体	−0.03			
所属団体の多元性			−0.02	
高校部活	−0.03		−0.03	
趣味友人	0.08		0.07	
仲のよい友だちの数	0.09		0.09	
恋人交際経験	−0.01		0.00	
制度への信頼	0.05		0.05	
日本への誇り（q17の逆転総和）	0.13	**	0.13	**
生活満足度（q39の逆転）	0.22	**	0.22	**
一日のテレビ視聴時間（分）	−0.03		−0.04	
一日の携帯メール送受信通数	−0.02		−0.03	
調整済み R2 乗	0.07	**	0.07	**
N	451		451	

一般的信頼スコアを被説明変数とした重回帰分析
** p<.01　＊ p<.05

表　政治的参加・1（直接行動＝意見表明）

説明変数	β		β	
性別（男＝1、女＝2）	0.00		0.02	
年齢	0.05		0.04	
父学歴（義務教育＝1、それ以上＝2）	−0.13		−0.13	＊
母学歴（義務教育＝1、それ以上＝2）	−0.05	＊	−0.04	
趣味に関するサークルや団体	0.09			
所属団体の多元性			0.25	**
高校部活	0.06		0.04	
趣味友人	−0.06		−0.08	
仲のよい友だちの数	0.16	**	0.15	**
恋人交際経験	0.08		0.05	
制度への信頼	0.06		0.06	
日本への誇り（q17の逆転総和）	−0.06		−0.06	
生活満足度（q39の逆転）	0.03		0.03	
一日のテレビ視聴時間（分）	−0.09		−0.08	
一日の携帯メール送受信通数	0.10	＊	0.09	
調整済み R2 乗	0.06	**	0.12	**
N	437		437	

直接行動スコアを被説明変数とした重回帰分析
** p<.01　＊ p<.05

表　政治的参加・2（間接行動＝支払参加）

説明変数	β		β	
性別（男＝1、女＝2）	0.08		0.09	
年齢	0.12	＊	0.12	＊
父学歴（義務教育＝1、それ以上＝2）	−0.11	＊	−0.10	
母学歴（義務教育＝1、それ以上＝2）	0.12	＊	0.12	＊
趣味に関するサークルや団体	0.10	＊		
所属団体の多元性			0.14	**
高校部活	−0.01		−0.02	
趣味友人	0.06		0.05	
仲のよい友だちの数	0.10	＊	0.09	＊
恋人交際経験	0.15	**	0.14	**
制度への信頼	0.05		0.04	
日本への誇り（q17の逆転総和）	−0.05		−0.06	
生活満足度（q39の逆転）	−0.07		−0.07	
一日のテレビ視聴時間（分）	0.00		0.01	
一日の携帯メール送受信通数	0.07		0.07	
調整済み R2 乗	0.08	**	0.09	**
N	445		445	

間接行動スコアを被説明変数とした重回帰分析
** p<.01　＊ p<.05

以上の分析結果をふまえて趣味縁と公共性・市民性との関係について以下のように整理することができるだろう。

第一に、趣味縁は公的領域へと延びていく側面（趣味集団）と私的領域へと延びていく側面（趣味友人）とを持つ。日本の若者においては趣味縁は前者へ傾いており、さらに学校縁が趣味集団を代替するため、前者の側面が相対的に弱くなっている。

第二に、趣味集団への所属もさることながら、集団所属の多元性が公共性・市民性とプラスに関連している。この点で若者の友人の使い分け志向は、社会関係資本の形成にとって潜在的にはプラスの効果を持つ可能性がある。

第三に、パーソナルネットワークは公的領域に対立するものというよりも、むしろ趣味縁と相補的に機能し、社会関係資本形成に対してプラスの機能をもっている。一見自己目的的にみえる若者のコミュニケーションも副次的に公共性へのチャネルを開きうるということだ。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計　６件）

① 浅野智彦、現代日本における若者の市民性（1）――趣味縁の両義性、日本社会学会第 81 回大会、2008.11.23、東北大学

② 辻泉、現代日本における若者の市民性(2)――パーソナル・ネットワークと「趣味縁」の実態、日本社会学会第 81 回大会、2008.11.23、東北大学

③ 羽渕一代、現代日本における若者の市民性（3）――私的領域における社会的関心の涵養、日本社会学会第 81 回大会、2008.11.23、東北大学

④ 岩田考、現代日本における若者の市民性（4）――非正規雇用と政治・社会参加、日本社会学会第 81 回大会、2008.11.23、東北大学

⑤ Tomohiko,Asano, Koh,Iwata, Izumi,Tsuji, Civic engagement developed in leisure activity groups and close friend networks in Japan, International Sociology Association 2008.9.6 Faculty of Communication Blanquerna University of Ramon Llull

⑥ Keiko,Yamaguchi, Ichiyo,Habuchi, Youth and Homelessness in Japan, International Sociology Association 2008.9.6 Faculty of Communication Blanquerna University of Ramon Llull

〔図書〕（計　１件）

① 羽渕一代（編著）、恒星社厚生閣、どこか＜問題化＞される若者たち、2008、iii-x、163-181

６．研究組織

(1)研究代表者

浅野　智彦（ASANO TOMOHIKO）
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号：00262220

(2)研究分担者

(3)連携研究者

川崎　賢一（KAWASAKI KEN-ICHI）
駒澤大学・グローバル・メディア・スタディーズ学部・教授
研究者番号：20142193

岩田　考（IWATA KOU）
桃山学院大学・社会学部・准教授
研究者番号：60441101

羽渕　一代（HABUCHI ICHIYO）
弘前大学・人文学部・准教授
研究者番号：70333474

辻　泉（TSUJI IZUMI）
松山大学・人文学部・准教授
研究者番号：00368646